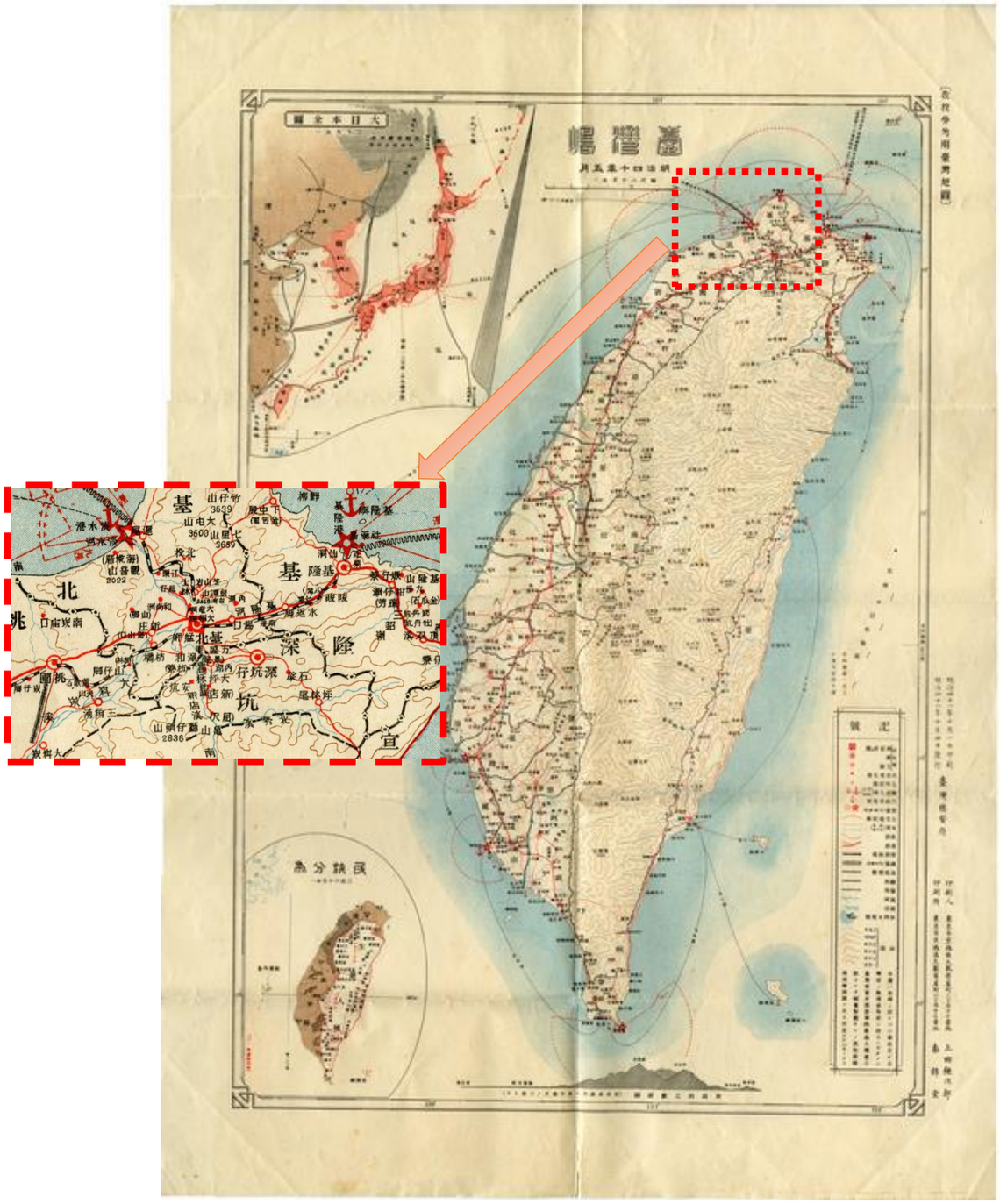
日清戦争後の台湾地図



1908 年（明治 41）「台湾嶋（教授参考用台湾地図）」

松田三左衛門家文書（当館蔵）デジタルアーカイブへ

解 説

1895 年（明治 28）の**下関条約**を経て、台湾、澎湖諸島の日本割譲が決定すると、台湾北部の有力者たちは清国の台湾巡撫（長官）の唐景崧に割譲阻止・徹底抗戦を迫り、5 月 15 日に台湾民主国として独立を宣言しました。

この動きに対して日本は樺山資紀を初代台湾総督に任命し、近衛師団に台湾接収を命じています。日本軍は約 10 万人の台湾人義勇軍の抵抗にあいながらも 6 月 7 日に台北を占領し、11 月 18 日に全島を制圧しました。しかし、台湾平定後も義勇軍のゲリラ活動は続き、民政に移管後も「土匪」と呼ばれる武装組織が周辺の民衆を糾合して蜂起しています。このため 1898 年から 1902 年の 5 年間に日本政府が公式に認めた「叛徒」だけでも 1200 人が処刑・殺害されています。

台湾の統治は第 4 代総督の児玉源太郎と民政長官後藤新平の時代に転換し、土地調査事業、縦貫鉄道建設、基隆築港の三大経済施策が行われました。この事業資金の引き受け機関として台湾銀行が設立されています。土地調査事業は地租の確保を目的とし、阿片・食塩・樟脳などの専売事業とともに台湾財政の根幹をなしていました。また鉄道建設や築港は軍事的な目的とともに、島内の結合や日本との経済的な連結を目的に行われました。

日露戦争前後には土地調査事業の完了、貨幣制度の確立、鉄道の全線開通など植民地化の基礎が確立しました。

資料の注目ポイント

資料は 1908 年（明治 41）10 月発行の台湾周辺の地図です。小学校の授業での使用を目的に作成されました。同年に完成した台湾鉄道（台北―台中―台南）も記載されています。

また、この地図は 1910 年（明治 43）の**韓国併合**の前のものですが、左上の大日本全図を見ると日本と朝鮮半島が同色で塗りつぶされています。当時の日本における朝鮮半島への一般的な認識（三次にわたる日韓協約で事実上の植民地化）がうかがえる資料です。

関連資料

名称	概要	備考
「台湾嶋（教授参考用台湾地図）」	松田三左衛門家文書（当館蔵） A0169-02298	デジタルアーカイブ福井で閲覧可能。 https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/archive/da/detail?data_id=011-326845-1-p1

参考文献

・『国史大辞典』　吉川弘文館
・『日本史（ＡＢ共通）　教授資料　研究編』山川出版社